小学国語通信　2019年　春号

内容解説資料

ことばだより

■目次■

巻頭随筆　教育の可能性をひらく教師……田近洵一　2
新版教科書のご紹介
国語
子どもが言葉と出会うために……木下ひさし　3
言葉による見方･考え方を働かせるとは……中村和弘　8
実践レポート　カリキュラム･マネジメントを意識した実践例……大塚健太郎　10
書写
体幹を意識した姿勢，効率のよい鉛筆の持ち方……笹田　哲　14
教科横断的な書写学習の在り方……加藤泰弘　17

教育出版

巻頭随筆

教育の可能性をひらく教師

――学習材の価値を引き出し、生かすのは教師である

田近洵一
東京学芸大学名誉教授
元早稲田大学教授

校庭の一本の桜の木も、また空に浮かぶ一片の雲も、それをどう生かすかによって、それぞれ優れた学習材となる。そこに、どのような学習材としての価値を見いだすか、あるいは、学習材としてどのような価値を与えるか、その鍵を握っているのは、一人一人の教師である。原材料（資料）としてどんなに優れた文化的な価値を有していても、それを生かす教師がいなければ、その価値は学習に生かされることはない。

原材料に、学習材としての価値を見いだし、あるいは学習材としての価値を与え、学びを成立させる責任は、教師にある。優れた原材料を与えるから、それを正確、かつ忠実に受け止めて、教材として十分に活用せよと、権威筋から「上から目線」で言われても、一人一人の教師が、その価値を自ら見いださないかぎり、教材として生かされることはない。教師がいて、初めて原材料は、学びを成立させる学習材として生かされるのである。

ところで、第九期の教育課程の改訂が発表され、それに基づき、新しい教科書の編集が進められてきた。新しい時代に生きる資質・能力を育てるため、言葉による見方・考え方をはたらかせて、主体的で対話的な深い学びの成立を図ることのできる教科書の編集が課題となった。私たちは、そのための教材の発掘と、それを生かしたアクティブ・ラーニングの成立を、教科書の上に実現させようと努めてきた。新しい教科書『ひろがる言葉　小学国語』は、その努力の成果である。編集に携わってきた者としては、この教科書こそは、新しい時代をひらく学習を成立させる可能性をもった学習材集だと信じている。現場の先生がたがこの教科書を生かして、新しい時代をひらく言葉の教育の可能性を見いだしていってくださることを願っている。

教科書は、学習参考書でもなければ、何かの免許取得のための技能教則本でもない。特に、国語の教科書は、学び手の主体的なアクティブ・ラーニングを触発し、自己学習能力を発揮させる、そしてそのことを通して資質・能力の向上を図ろうとするものである。もちろん教科書には、一般的・標準的な学習の手順が、「学習のてびき」として示されている場合が多い。その「てびき」も、実は教材である。それをどう生かすか、それを生かして学習の具体化をどう図るかは教師に任されている。「てびき」をも含めて、教科書を学び手にとってアクチュアルな学習材としてどう生かすか、どのようなアクティブな自己学習活動を触発し、どのような自己学習能力を育てるか。その鍵を握っているのは、教師である。最後に、あえて繰り返すが、教科書を生かすのは、現場の教師である。教師の教育観と創造力が、教科書を価値ある学習材として生かすのである。

私たち、編集に携わった者は、それぞれ精魂を傾けて完成させた教科書が、教育現場の先生がたのお一人お一人によって、価値ある学習材として生かされることを、心から願っている。

たぢか　じゅんいち　一九三三年生まれ。長崎県出身。日本国語教育学会会長。川崎市、東京都で小学校・中学校・高等学校の教壇に立つ。東京学芸大学教授、早稲田大学教授を歴任。近著に『小学校国語科授業研究　第五版』『国語教育指導用語辞典　第五版』（ともに共編、教育出版）などがある。

国語

特集 新版教科書のご紹介

子どもが言葉と出会うために

聖心女子大学教授　木下（きのした） ひさし

成蹊小学校教諭、宮城教育大学教授を経て、現職。近著に『言語活動中心 国語概説―小学校教師を目指す人のために―』（共編著、学文社）。学校現場での実践経験を基盤に、母語としての言葉の学びのあり方を考究している。

はじめに

新しい学習指導要領の実施に向けた新しい国語科教科書ができました。日本語を学ぶ全国の子どもたちと先生がたにお届けします。

前版に続き教科書の書名を『ひろがる言葉　小学国語』としました。

この教科書で学ぶことによって豊かな日本語を広げていってほしい。子どもたちが価値ある言葉と出会い、その言葉がさらに新しい言葉との出会いを生み出していってほしい。

このような思いがこの書名にこめられています。

一、子どもの側に立って

言葉が広がり、自己を語る言葉を得て表現することによって、人は他者や世界とつながっていきます。言葉による理解と認識を経て新しい自分と世界をつくっていきます。この過程が言葉の学びです。

言葉すなわち母語の学びは、言葉の操作やその技術を得るだけのものではありません。他者とのコミュニケーションはもちろんのこと、思考や想像し創造するための言葉を育む活動です。言葉で生きる言語主体を形成していく過程です。そして、それは学び手である子どもが主体的に言葉に関わり、言葉の力を協働的に獲得していくことで成立します。

主体的で協働的な学びは、新しい学習指導要領の理念でもあります。これを実現していくためには具体的にどうすればよいのかが現場には問われます。

以上のような言葉の学びに関する原理を踏まえ、私たちは「子どもの側に立つ」ということを編集の基本に据えました。子どもが使う教科書なのだから、きわめてあたりまえのことかもしれません。けれども、理念や建前、あるいは方法等が先に立ちすぎると、肝心の子どもが見えなくなってしまうことがあるのです。ですから、子どもに迎合するというのではなく、言語能力を育むための意味ある学びを成立させるためにはどのような教材や活動がよいのか、ということを学び手である子どもの側から考えることを念頭に置くようにしました。

また、子どもの側に立つということは同時に教師の側に立つというこ

とでもあります。子どもが学びやすい教科書は、教師が教えやすい教科書でもあるはずです。子どもと教師と教材（教科書）がそろって教室の授業が創造されていきます。

以上のような基本的編集理念のもとで、子どもにとっても教師にとっても使いやすい教科書として新しい『ひろがる言葉』ができました。

二、「現場主義」の教科書

○学びのストーリー

現場主義とは子どもたちが学ぶ現場、言語生活の場を大切にすることです。実際の教室で使うことを常に想定することです。

個々にそれぞれ異なる個性をもった子どもたちがいます。名前が異なるように育っている環境もまた異なります。そのような多様な子どもたちが集い、互いに学びを深めていくのが教室あるいは学校という場です。場だけではありません。一時間、一日、一か月、一年という学びの時もまた共有していきます。

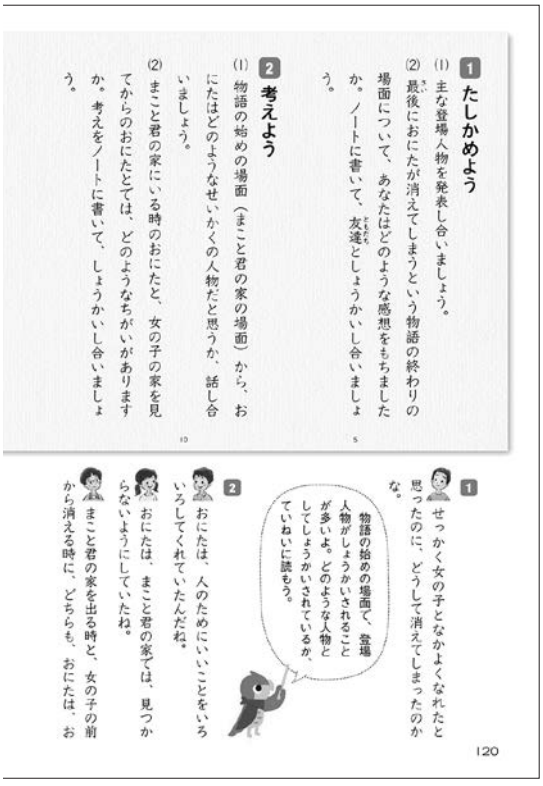
そのような子どもたちの学びの流れを「学びのストーリー」と捉え、年間の学習計画を組んでみました。大人の側の都合でつくった形式的な年間計画ではなく、学年という一年間の成長の時を考慮した単元や教材の配列となっています。六年分の目次を並べたときに、領域などの縦の系列がそろっていると見やすくなります。けれども、それは本当の系統でしょうか。ある領域の単元をある決まった月に毎年行うというのは大人の側の都合です。形式的、表面的に学びの系統を考えるのではなく、その学年でどのような学びが積み重なっていくのか、学びのストーリーがどのように生まれていくのか、とその当該学年一年間の流れを子どもに即して考えながら年間の単元構成を設定しました。他教科との関係や学校現場の年間の流れもそのストーリーに含まれます。

また、個々の単元や学習活動の中にも学びのストーリーはあります。学習過程と言いかえてもよいのですが、型にはめる過程ではなく、意欲がわき主体的に取り組める学び手のオリジナルストーリーが生まれる学習活動過程を目ざしています。そのために、主要な単元には単元扉を置き、学びへの誘いと具体的目標を明示することによって、より意欲を高めるようにしました。そして、目標と対応するように単元の最後には振り返り活動を設定し、成長を確認できるようになっています。

例えば、「読むこと」単元のいわゆる「学習のてびき」です。学びの方法が意識できるように、また、学びの方向が見えるように四段階のステップを基本として作成しました。

①確かめよう
②考えよう
③深めよう
④広げよう

それぞれの教材の特性に合わせてこの四段階で内容を構成しています。



1 たしかめよう

(1) 主な登場人物を発表し合いましょう。

(2) 最後におにたが消えてしまうという物語の終わりの場面について、あなたはどのような感想をもちましたか。ノートに書いて、友達としょうかいし合いましょう。

2 考えよう

(1) 物語の始めの場面（まこと君の家の場面）から、おにたはどのようなせいかくの人物だと思うか、話し合いましょう。

(2) まこと君の家にいる時のおにたと、女の子の家を見てからのおにたとでは、どのようなちがいがありますか。考えをノートに書いて、しょうかいし合いましょう。

1 せっかく女の子となかよくなれたと思ったのに、どうして消えてしまったのかな。

物語の始めの場面で、登場人物がしょうかいされることが多いよ。どのような人物としてしょうかいされているか、ていねいに読もう。

2 おにたは、人のためにいいことをいろいろしてくれていたんだね。

おにたは、まこと君の家では、見つからないようにしていたね。

まこと君の家を出る時と、女の子の前から消える時に、どちらも、おにたは、お

120

何が書かれているのかをしっかりと確認し、そのうえで文章の構造を把握し、対話的に文章と関わり自分の読みを生み出していくのです。ステップを意識することによって、より主体的で対話的な深い学びが創出されるはずです。

○自学書として、協働テキストとして

学習過程や活動を示すだけではなく、そこでの学びを助ける紙面構成にもなっています。キャラクターを登場させ、子どもに寄り添うように、学びのヒントや指針を示すようにしました。これは「自学書」としての教科書を意識してのことです。

教室で使用するのが教科書ですが、それだけではなく個々に読む「自学自習」にも対応できるようにしました。教科書もまた一冊の本なのです。子どもたちが自らすすんで読んでくれなければ、主体的な学びは生まれないでしょう。

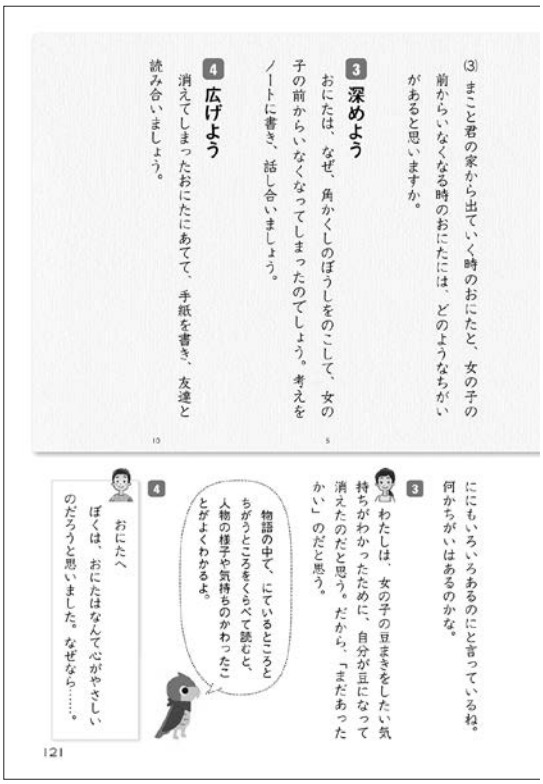
また、主体的な学びには楽しさが不可欠です。知的な楽しさに満ちた一冊の本であることが教科書には求められます。イラストをはじめとして、子どもたちが楽しく学べるような紙面構成を工夫してあります。

学ぶ楽しさの中にはともに学ぶ楽しさもあります。個人のための自学書でもありますが、教科書ですから、同じものをともに学ぶ友達が持っています。共通の材料を有効に使用すべく、話し合いを中心とした協働的な活動も多く示しています。

○学びやすく教えやすい

子どもが主体的に学んでいける力をつけることが大きな教育目標となりますが、子どもだけでは主体的にはならないでしょう。そこに教師の指導がなくてはなりません。強制ではなく指導です。教え育むのです。

子どもにとっての学びやすさは、教師にとっての教えやすさにならなければなりません。目標を明示したり、学習過程を明確にしたり、学びのヒントや情報を載せているのは、そのためです。教師の側の指導過程



(3) まこと君の家から出ていく時のおにたと、女の子の前からいなくなる時のおにたには、どのようなちがいがあると思いますか。

3 深めよう

おにたは、なぜ、角かくしのぼうしをのこして、女の子の前からいなくなってしまったのでしょう。考えをノートに書き、話し合いましょう。

4 広げよう

消えてしまったおにたにあてて、手紙を書き、友達と読み合いましょう。

にんにもいろいろあるのにと言っているね。何かちがいはあるのかな。

3 わたしは、女の子の豆まきをしたい気持ちがわかったために、自分が豆になって消えたのだと思う。だから、「まだあったかい」のだと思う。

物語の中で、にているところとちがうところをくらべて読むと、人物の様子や気持ちのかわったことがよくわかるよ。

4 おにたへ
ぼくは、おにたはなんて心がやさしいのだろうと思いました。なぜなら……。

121

三下『おにたのぼうし』

や重点も見えるような教科書でもあるのです。また、読書指導用のたくさんの図書を紹介していますが、これも教科書から出発して次の学びへとつなげていく意味があります。活用できる教科書なのです。

今回の改訂でも全学年で上下巻の二分冊を維持しました。子どもの肉体的負担の軽減もありますが、一年に二回、新しい教科書を手にすることで、可能なかぎり教材と新鮮な出会いをしてほしい、そのような思いもありました。子どもの側に立って考えた結果です。

三、「学力」を育む教科書

○言葉の力をつける教科書

学力向上のために言語能力の育成が急務であるとして、全ての教科においての言語活動が重視されてきています。その言語力向上の中核となるべき教科は国語科でしょう。しかし、だからといって学力を狭く捉え、

言語の運用能力のみとしてしまうと、学力そのものが危うくなってしまいます。

国語教科書はドリルでもないし練習帳でもありません。

もちろん読み物集でもありません。

言葉が、あるいは母語が人間形成に不可欠であるということを踏まえた、学力を総合的に捉えたバランスのよい教科書が求められます。そのような教科書を編集しました。

感動のみを押しつけるのではなく、また、無味乾燥な技能習得ばかりを行うのではなく、出会う意味のある言葉群を教材とし、そこでしっかりと学力の基礎となる日本語を学ぶことが必要なのです。

学習過程の明確化や思考を深めていくステップも最終的に学力、すなわち言葉の力の育成に結びついていきます。

学習指導要領には「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と国語科の目標が掲げられています。この目標達成に資することが教科書には求められます。

この求めに十分応えうるような、つまり、「正確に理解し適切に表現する資質・能力」としての言語能力、言葉の力をつける教科書を目ざしました。

二上『うれしく　なる　言葉』

○意味のある多様な言語活動

言語活動とは何かを改めて考えてみましょう。いうまでもなく「話す」「聞く」「書く」「読む」活動です。この四種類の活動が総合的に組み合わさって言語は運用されていきます。そして、これらの活動は機械的なものではありません。なんらかの意味を伴ってこそ学びとなっていきます。

教科書を編集するにあたってはこの言語活動をいま一度見直しました。活動として意味のある、つまり、言葉の学びを成立させることのできる活動になっているのかどうかということです。

この「意味」には主体性も含まれるでしょう。自ら学ぶ意味です。そこに知的な楽しさが発見できれば子どもは積極的に言語活動に関わります。そして、その活動を振り返ってメタ的に成長を捉えることができれば、そこにこそ学んだ意味が生じます。

関心や興味をもたせ、意欲を喚起し、充実した活動を行い、成果を実感する。そのような単元の流れに満ちた教科書なのです。

四上『新聞を作ろう』

四、「言葉」と出会う教科書

○価値ある教材群

言葉は社会的な存在です。これからの社会に生きる子どもたちは多くの情報としての言葉に接することになります。国語科ではその情報とし

ての言葉を自分のものとして取り込んでいくこと、そして、自己実現の手段としていくことを学びます。

言葉の学び、すなわち意味ある言語活動のためには、学ぶ価値のある言葉が教材として存在しなければなりません。編集にあたっては国語教科書としての教材価値をしっかりと吟味してきました。

語彙指導の改善だけではありません。定評ある教材作品は引き続き掲載しますが、そこから引き出される価値は新たな活動によって異なってくるはずです。古いから価値がないということはありえないはずです。その読まれる時代時代において価値が変容していくこともあります。ですから、本当に文化として価値あるもの、いつの時代でも出会ってほしい言葉たちは大切に残していきます。

そのうえで今日的な課題を視野においた新教材を加えていきました。

○出会いと対話を生む単元

言葉との出会いは必然的に対話を生み出します。対話は単に周りの友達との間に交わされる言語活動ではありません。子どもと子ども、子どもと教師、そして、子どもと教科書教材との対話。さらには、時空を超えた他者との対話や過去の自分との対話。

扉から始まる各単元での学びのストーリーは、多様な出会いと対話を生み出すことでしょう。

まさに子どもたちの「学びたい」を支える教科書なのです。

一上『なかよしの　き』

おわりに

左に示した一年生上巻の巻頭教材をご覧ください。子どもたちが発見した不思議な木がどんどん伸びて広がっていきます。この絵にも『ひろがる言葉』の思いをこめました。本教科書を用いて、言葉の木を大樹にしていってほしいのです。その木を活用していってほしいのです。

多様な人々が協働して持続可能な社会をつくっていくためには、多くの課題があります。それらの課題を解決していくためにも、言葉を主体的に学んでいく必要があります。自分を形成し人々とつながる真正の言葉の教育が求められています。

現代は変化の展望が不明確な社会かもしれません。けれども言葉の存在しない人間社会はありえません。民主的で豊かな社会形成のために、一人一人に母語である日本語を豊かに育みたいものです。そのための教科書です。

未来に生きる子どもたちのために『ひろがる言葉』を贈ります。

言葉による見方・考え方を働かせるとは

東京学芸大学准教授　中村和弘（なかむら かずひろ）

中央教育審議会・国語ワーキンググループ専門委員、同言語能力の向上に関する特別チーム専門委員、学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者（小学校国語）として、学習指導要領の改訂に携わる。

一　「言葉を学ぶ」教科としての国語科の授業

国語科は「言葉を学ぶ」教科である。

物語を読んで登場人物の気持ちについて話し合っても、説明文を読んでわかったことを新聞にまとめても、その言語活動のさなかに、「言葉を学ぶ」ことが子どもの中に起きていなければ、国語科の学習に取り組んだとは言いがたい。

「言葉を学ぶ」とは、ふだんは意識することのない「言葉」を学習の対象とすることであり、これもまたあまり意識することのない「言葉の使い方」（話したり聞いたり書いたり読んだりすること）について、意識的によりよい使い方を考えたり向上させたりしていくことである。

例えば、「言葉」の意味や使い方、効果などに着目しながら、どう読めばいいのかを考えたり、どう書けばいいのかを判断したりすること。文章の内容を読むだけではなく、「言葉」に着目し、筆者の書き方の工夫などを考えること。教科書にある文章例をまねて書くのではなく、語句の選択や構成などを工夫し、試行錯誤しながら相手や目的に応じた文章を書き進めていくこと。国語科の授業とは、そうした「言葉を学ぶ」ことに取り組む時間である。

二　『花を見つける手がかり』を例に

このように考えると、『小学校学習指導要領解説　国語編』で示されている「言葉による見方・考え方」についての次の説明も、わかりやすいだろう。

言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。（十二頁）

一言でいえば、言葉による見方・考え方を働かせるとは、「言葉」に着目し、読んだり書いたりする活動の中で、「言葉」の意味や働き、その使い方に目を向け、意識化していくことである。

例えば、新しい教科書の『花を見つける手がかり』（四上）の手引きを見てみると、「1たしかめよう」と「2考えよう」では、文章に即して、課題をつかんだり実験を表に整理したりして、まず内容の読み取りが図られている。続いて、「3深めよう」で実験の進め方や日高先生たちの考え方の特徴を捉えたあと、「4広げよう」では、「この文章を読むと、日高先生たちといっしょに実験しているような気持ちになります。それは、この文章のどんな書き方によるのでしょうか」となっている。これは、文末表現への着目を促しているのである。

この教材文の場合、内容の理解のみを授業のねらいとすると、理科の学習に近くなってしまう。もちろん、言葉を通して内容を正しく読み取ることは、国語科の学習として必要なことである。しかし、あわせて、文章中にさまざまに使われている「言葉」に着目し、その意味や働き、

使い方などを検討していくことが、言葉による見方・考え方を働かせることにつながる。内容とともに、書かれている「言葉」を意識させ、「言葉そのもの」に関心をもたせることが、国語科の授業では大切となる。

三　〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕

このように、言葉による見方・考え方を働かせながら、文章を読んだり書いたりするためには、〔知識及び技能〕の事項と〔思考力、判断力、表現力等〕の事項とを、相補的に身につけていくことが必要となる。文章の内容ではなく、文章の書き方――接続語の使い方や文末表現への着目、文章構成の工夫や比喩表現の効果など――に目を向けていくためには、そもそもそういった種類の「言葉の知識」が必要である。それらは主に〔知識及び技能〕の事項として編成されている。

一方で、そうした知識は、ただ知っているだけでは、読んだり書いたりするときに生かされてこない。例えば、文章構成に関する知識を使って、今読んでいる文章について、構成に着目してその特徴や筆者の工夫を考えてみる。あるいは、これから書こうとしている文章について、さまざまな構成の仕方を検討し、相手や目的に合った書き方を工夫してみる。これらの「読むこと」や「書くこと」などの領域は、〔思考力、判断力、表現力等〕の事項として示されているので、どう読むか、どう書くかを考えたり判断したりすることが求められている。

このように、言葉による見方・考え方を働かせながら読んだり書いたりするには、「言葉」に関する知識・技能と、それらをどう駆使して読んだり書いたりすればいいのかという思考力・判断力の、両方の資質・能力が必要となる。単元においても、〔知識及び技能〕の事項と〔思考力、判断力、表現力等〕の事項とを両輪のように組み合わせて、目標／評価を考えていくことになる。先に引用した『解説』の最後に、「『言葉による見方・考え方』を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる」としているのも、こうした理由からだろう。

四　他教科の学習を深めるために

もう一つ筆者が大切なことと考えているのは、言葉による見方・考え方を働かせることが、他教科の学習にもつながるという点である。一般的に、新学習指導要領で使われている「見方・考え方」とは、その教科の学びの本質にあたるものであり、教科固有のものであるとして説明されている。ところが、言葉による見方・考え方は、少し事情が違うようなのである。

これまで述べてきたように、国語科で文章を読むときには、書かれている内容だけでなく、どう書いてあるかという「言葉」の面にも着目して、読んだり考えたりしていくことが大切であった。

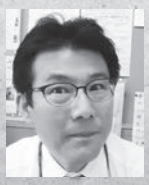
この「言葉」に着目し、意味を深く考えたり、使い方について検討したりすることは、当然、他教科の教科書や資料などを読む際にもつながっていく。社会や理科の教科書を読みながら、「この言葉の意味は何だろう、何を表しているのだろう」と、いったん立ち止まって言葉と対象の関係を考えたり、「この用語と前に出てきた用語とは似ているが、何が違うのだろう」と言葉どうしを比較して検討したりする。

学習者自身が言葉による見方・考え方を働かせることで、教師から「その言葉の意味を調べてみよう」「用語どうしを比べてみよう」と言われなくても、「言葉」を手がかりとしたこうした学びを自発的にスタートさせることが可能となる。国語科で言葉による見方・考え方を働かせながら学習を重ねてきた子どもたちは、他教科の学習においても、「言葉」を意識的に捉えることができる。そのことが、社会や理科などの内容の理解を促進させるのである。

先の『解説』には、そこまで踏み込んだ説明はされていない。ただ、言語能力が各教科等の学習の基盤となる資質・能力だとすると、国語科が育成するのは、話し合いの方法やレポートの書き方といったものだけではなく、言葉による見方・考え方を働かせられるようにすることこそが大切なのではないか、筆者にはそう思えてならない。

実践レポート

カリキュラム・マネジメントを意識した実践例



東京学芸大学附属小金井小学校教諭
大塚 健太郎（おおつか けんたろう）

カリキュラム・マネジメントとは

今回の学習指導要領改訂において、「カリキュラム・マネジメント」という言葉がクローズアップされているのは、中央教育審議会の答申で三つの側面に論点整理されたためだと考えられます。しかし、特に新しいことを要求されているのではなく、今までもさまざまなレベルで力ある先生がたは取り組まれてきたことです。今回、もっと担任レベルにおいて自由に指導計画を組み立てていきましょう、子どもの実態に合わせた合理的な単元展開が存在するはずであるので、それを自信をもって行ってください、というエールとして、私は受け止めています。

その一つの考え方は、教科横断的な視点から一年間のカリキュラムを見直し、その配列を意図的に組み替えましょうというものです。学校行事に合わせて発表の場をそこにもってくる程度のことはよく行われていますが、その先に、内容的に重なっていたり連続して学習することで意欲がつながっていったり、習得した技能や知識が生かせる実の場が設けられたりというものを、教科の垣根を越えて配置転換しましょうというものです。しかも、子どもたちの興味・関心、生活実態からくる学習課題などを踏まえて、隣のクラスと異なった学びの歩み方をしてもかまわないということです。

学びのつなげ方

私はカリキュラム・マネジメントを意識して学びをつなげていくとき、おおまかにいうと三つの観点があると考えています。

まず、学びをつなげるためにすぐ思いつくのは、題材のつながりです。教科書教材にも教科間の連携を意識した題材はあるのでわかりやすいと思います。三年生では、『町の行事について調べよう』（教育出版、三下）という教材があります。そこでは地域のできごとや催し物を調べて伝えることになっています。この内容を社会科の地域の学習とあわせて行うというものです。内容は社会科で、方法は国語科という組み合わせです。

次に、言語活動のつながりです。例えば新聞を書くという言語活動です。五年生に『新聞を読もう』（五上）という教材があります。この中で新聞記事がどのように書かれているのかを学ぶのですが、その学びを生かして新聞記事を書く場を学級活動に取り入れるというぐあいです。もちろん、社会科の情報伝達について考える単元と並行して行うと相互作用し、互いの理解がいっそう深まるでしょう。

最後は思考のつながりです。思考とは少々捉えにくいものですが、例えば低学年では、新しい情報と出会ったとき前と同じように考えてよいのか、それとも違う方法で考えなければならないかで判断することです。「赤い

お花3本と白いお花2本があります。合わせて何本でしょう。」という算数のたし算の文章題があります。色に着目すると違う花として認識するためたせませんが、花と見ると同じものなので本数をたすことができます。ですから、色で見ると違うけれども花としてくくれば同じとなるのです。この「同じ」と「違う」という思考の枠組みを、説明的文章を読むときにも、子どもたちは使っているのです。一年生の『すずめの　くらし』（一上）では、二つの問いに答えるかたちで文章が進みます。答えに「すずめは、たべものをさがしているのです。」とあり、次の問いの答えには、「すずめは、みずあびをしているのです。」とあります。ここから、「すずめは」は同じで、「していること」が違う情報であることがわかります。違っているところに着目して文章を読むとよいことがわかるのです。

これはほんの一例ですが、理科の実験の条件統制に関する思考は、四年生の『花を見つける手がかり』（四上）などからも思考の枠組みが見つけられます。複数の教科を教えることのできる担任だからこそ、思考レベルまで意識して教科横断的に考え、子どもに環境として提供できるものだと考えています。

以上、三つの観点を意識して学びの質を高めるためにカリキュラム・マネジメントを行いますが、あわせて行う側の教科内容、指導事項を理解しておかないと、活動あって内容なしということになりかねません。例えば、新聞という形式でまとめをすればなんでもいいかというと、そこに、見出しと記事の関係性や、リード文から徐々に細かい情報へ到達していく新聞独自の書きぶりの理解なくしては、国語の学習内容がないことになります。逆に、地域の催し物を取材した記事さえあればよいかとなると、地域の歴史を身近に感じる歴史学習の入り口であるという社会科の内容を落としてしまうことになりますので、伝統行事という対象をおさえなくてはなりません。

ですから、先ほど、クラスごとに学びの歩みが変わることに問題ないと述べましたが、このレベルになると、学校単位で地域活用を考えるべきであるし、教科の専門の知識も必要になってきます。学校や学年で意見交換をしながら、毎年蓄積していくことが、現実的であると考えます。それから、年間指導計画は、子どもたちとの学びの過程で学習実態に応じて何度も書きかえるということです。少なくとも、学期ごとには修正をかけることをお勧めいたします。

私の年間指導計画（三年）

春に担当学年が決まると、初めに行うことは、教材を一覧にすることです。実の場として活用できそうな行事はないかと考えていきます。一学期は宿泊生活でした。『つたえよう、楽しい学校生活』（光村図書、三上）で伝えるべき学校生活の内容を、教科書にある仕事や授業の様子から学校行事の「至楽荘生活」（宿泊生活）に変更しました。報告する内容を初めて行く「至楽荘生活」に変えることで、保護者に伝える意義も本物となり、子どもたちのやる気は格段にアップしました。さらに、理科で『昆虫の体を調べよう』という昆虫の体のつくりを学習したあとに、『生き物のとくちょうをくらべて書こう』（三上）をあわせ、実際に「至楽荘生活」内で海の生き物を調べたり、海で生き物を採取したりした経験を報告することもこの中に取り入れました。昆虫の体のつくりを調べる過程と海の生き物を調べる過程や視点を理科で学び、図や絵を使い説明する方法を国語で学び、実の場として、「至楽荘生活」の発表会があることで、子どもたちにとって必然性のあるつながりを生むことができました。

二学期は、社会科のスーパーマーケットや農家の見学に行きます。そこでは、『インタビューをしよう』（三上）という教材が実の場に生かせます。そして、そのまとめの仕方として国語で見学記録文の書き方を学習しようと意識をつないでいき、『見学したことを知らせよう』（三上）という教材も学習できます。そこには、見学時にどのように見学カードにメモしてくればよいか、また見学後どのよう

にまとめていくかを学習できますので、社会科見学に行く前に学習することで、よりいっそうの効果を子どもたちが感じることができます。

実際の社会科見学では、インタビューして得られた情報も含めてたくさんの情報を得て見学を終えました。ですから、見学中にわかったことを見学カードに書き出し、帰ってきてからそれをもとに見学記録文を書くという国語の学習も、社会科で出た疑問を解決するために見学に行くという、子どもの立てた学習課題を解決する過程で主体的に行えました。

そして、三学期ですが、学年当初には計画していなかった『すがたをかえる大豆』(光村図書、三下)を中心教材に据えて、食育と絡めてプロジェクト型の単元をつくろうとしています。これは、「味覚の授業」や給食中の様子から子どもたちの食に対する興味・関心の高さを感じたからです。学年当初は『どちらが生たまごでしょう』(三下)を使って科学的な検証の思考スタイルを学び、一年間の理科学習を振り返って、気に入った実験を報告文にまとめる単元を考えていました。

また、三学期教材である『モチモチ

作成日　2019/2/10　第　7　版　担任　大塚健太郎

2学期	3学期
■【学校生活を楽しむ】 クラスとしての一体感を感じながらも個人個人の違いを生かし尊重することを再度確認し、2学期をスタートさせる。個の違いを生かすためには、コミュニケーション力を支える言葉の力を意識させる。違いを認識するための語彙力と共に、お互いを理解しようとする気持ちを大切に学習問題やクラス運営に当たることを心がける。その先に、このクラスのメンバーだからやってみたい、取り組む価値があると思える課題に挑戦させたい。	■【学校生活をつくる】 クラスのメンバーは2年固定であるが1年間の集大成としての3学期という意識と共にスタートさせたい。自分で何ができるようになったのか。何が成長できたのか。次の目標は何かを考えながら、上学年に向けて、学校生活を自分たちでつくるという意識を確実なものにさせたい。
与えられた課題をそつなくこなすことには長けているが、やり方が分からなかったり試行錯誤することを億劫がったりする傾向は強くなるばかりであったために、個々の違いに自信を持つことがなかなかできなかった。人と違うこと、自分で考えて試行錯誤することの価値を高めたく、道徳や学級活動で揺さぶりを掛け続けた。最後は、宿題をミニ自由研究風にする「自学」を取り入れることにより、自ら考えるおもしろさを取り戻せたように感じる。2学期最後は、自分たちの発案でお楽しみ会を行い楽しむことができた。 この成果を当初の計画より遅れてはいるが、一人一人が自分で考え意見を言えることこそが価値あるクラスの姿であり、そこに参加しそこで学ぶことがクラスで学ぶ意味だと、自他共に尊重できる学級へ育てたい。	

8	9	10	11	12	1	2	3
		運動会	音楽会			小金井セミナー	修了式
		附属幼稚園との交流			附属幼稚園との交流	節分	
夏休み報告会			味覚の授業		自分で作るお弁当の日		
見学したことを知らせよう インタビューをしよう わすれられないおくりもの （実習生）		くらしと絵文字（実習生） 係の活動について考えよう	ちいちゃんのかげおくり 俳句に親しむ ことわざ・慣用句	いろいろな手紙を書こう 詩を楽しもう	すがたをかえる大豆	おにたのぼうし 方法を選んで紹介しよう	どちらが生たまごでしょう 強く心にのこっていることを
見学先で知りたいことをきく インタビュー		よりよい活動に向けて最適解を求めて話し合う　提案する			話の中心	調べたことを発表	
課題解決を報告し共有するために書く 見学メモ		文章に対する感想や意見の伝え合い		相手や目的に合わせた表現	理由と事例 段落相互の関係	調べたことを書く	学年文集に残す出来事を振り返って取材する
物語を紹介するために あらすじをつかむ 場面を選ぶ		町で見付けたマークの説明をするために、段落の構成を意識して読む	ファンタジーを読む 気持ちの変化 戦争文学を読む		段落相互の関係 中心と要約	ファンタジーを読む 感想や考えをもつ 感じ方の違い	段落構成 事例と理由の関係
見学カードの分類、整理の視点 場面構成		段落構成 図とテキストとの相関関係	俳句 ことわざ・慣用句	手紙の形式 言葉のリズムと音節	イメージマップ 情報の整理の仕方 非連続型テキスト	民話・昔話	付箋操作 構成メモ 指示語　接続語
太陽の光のはたらきを調べよう		光のはたらきを調べよう	ものの重さを調べよう		豆電球にあかりをつけよう	じしゃくのふしぎを調べよう	おもちゃ博物館を作ろう
はたらく人とわたしたちのくらし わたしたちのくらしと農家の人の仕事			わたしたちのくらしとお店の方々の仕事		安全なくらし 火事からくらしを守る	事故や事件からくらしを守る	

の木』（三下）を不思議なお話として、ファンタジー教材である『白い花びら』（三上）のあとに続けて学習しました。しかし、ストーリーを追い『モチモチの木』の不思議さを感じることはできましたが、さすがに細かい時代背景まで考慮して、想像をふくらませて読み味わうことまでには至らない子がいました。そこで、その分を補うための単元が必要となりました。ですから、『おにたのぼうし』（三下）では、行動描写だけでなく情景描写まで読み味わえる単元を、節分などの行事と絡めて計画しました。

また、年間を通して三年生としての思考のつながりを意識することも忘れないようにしています。「情報の扱い方に関する事項」を手がかりとして、「考え」と「事例」の峻別（しゅん）や情報どうしの関係性を意識させます。一学期の昆虫と海の生き物の体のつくりを比較検討させたり、三学期の『おにたのぼうし』では人物関係図をこの視点で整理させたりします。

このように、子どもたちの興味・関心や学びの状況を加味するなどして、軌道修正をかけ、指導事項の学び残しがないようにしています。

平成30年度　3年 3組　学級経営案

【学校教育目標】

明るく思いやりのある子
強くたくましい子
深く考える子

【学年目標】

みんなで　なかよく　大きな　にじを

【担任が願う子どもの姿】

3年生のこの時期は、意欲とエネルギーにあふれ、様々な活動を通して、力が大きく伸びる大切な時期である。この意欲とエネルギーを成長につなげるものは、失敗を恐れずに、自信をもって、チャレンジする前向きな姿勢である。また、違いを生かすには虹のようにたくさんの色の集まりがさらなる美しさを描き出すように、違うことを受け入れ、認め合い、高め合っていく集団として成長していってほしいと願っている。

	1学期
学級づくりの重点	■【学校生活になじむ】 クラス替えした1学期。今までの環境から皆で新しいクラス集団を作るという意識をもち、互いの意見を最後まで聞き、よりよい考えや解決策を見付けていく思考習慣をつける。 また、中学年として生活・学習共に自立した言動・思考ができるように働きかける。 自分の得意なこと、好きなこと、興味のあることを中心に、クラスを運営する学習に参加しているという存在意識をもたせるように、学級活動、宿泊生活、学習方法など、全ての面で個の集まりで学級が成立していて、そのどの子もかけがえのない存在であるという意識と自信と安心をもたせるために、どんな発言や行動にも理由を意識させる。また、全体を意識した言動を褒め、価値付けていく。他者や現状に文句を言うのではなく、よりよくなるための思考力・判断力・表現力を身に付けていく。 All for One. One for All. の精神でクラスづくりをしていく。至楽荘生活を一つのステージとして意識してクラス作りをする。
振り返り	今まで指示があってからそつなくこなすことに慣れていて、自分から課題を見付ける、やりたいことを自由に企画してやってみることに抵抗を示していた。また、正解を見付ける、教師のもっている答えを当てることが学習であると思っている子どもたちが非常に多く、これを打破するのに時間がかかった。一人一人の意見を平等に扱うためにはどうするか。自由はどこまで自由なのかを考えていくうちに、一方を強調すると一方が崩れていき、みんなのクラスではなくなることに気付きはじめてきた。たくさんの試行錯誤を繰り返した結果、目ざすクラス像に迫る地ならしができた一学期であった。2学期は一人一人の違いがあるからこそ、学習が深まる、楽しいと感じる経験を自覚できるようにさせたい。

【学級の子どもの実態】

〇自己表現力
・対言葉
しっかりと自分の言葉で学習や日常を振り返ることができる言葉をもっている子がいる反面、どう振り返っていいか行動認識で終わり、思考面への追究の弱さが見られる子も多い。
→日記や学習の振り返り記述にテーマや制約を設けるなどして、意識的に自分に向かい、何ができたか、どのように取り組んだかなど、方法知、内容知両面から表現できるように場を作っていく。
〇コミュニケーション能力
・対事柄
自分の好きなことにはよく取り組むが、そうでないと、ほったらかし。
→好きを入り口として興味・関心を広げる単元作りをしていく。
・対言葉
ごく普通である。乱雑な言葉づかいをしている子は見られない。場に応じるという使い分けはまだない。
→目的、場、相手を意識させた言動ができるように、それらを確認しながら生活や学習を進める。
・対相手
比較的穏やかにだれとでも接することはできるが、数名孤立する子がいる。
→孤立している子の言葉を聞き、サポートすると共にスキル獲得への具体的な言葉と場を用意する。
・対自分
自分を振り返ることや自分のスキルを見通すことが、まだまだ弱い。
→学習や活動ごとに振り返りの時間を設けて、メタ認知する思考習慣をつけていく。
〇社会的スキル
教室の移動など声をかけないと、静かにできない。他者意識が薄い。
→常に社会の一員として存在していることを言い続ける。
時間に関してはルーズで開始時刻に切り替えができない。また、準備のできている子の時間を奪っている意識が薄い。
→1分の積み重ね、重みを具体的に見せていく。時間を守ることがどれだけ有益かを生活の中で実感できる場を設ける。
〇言語的スキル
音読させると、語彙がつかめておらず、変な箇所で息を継いだり、イントネーションがおかしかったりする子が数名いる。
→個々にはその都度確認しながら、全体では言葉について立ち止まる場を設ける。
書字に関しては、文字のバランスを無視して練習したり、丁寧に書こうという習慣のない子が10名弱いる。
→個別に対応すると共に、字形に意識の向く漢字指導をする。
〇生活スキル

		4	5	6	7
行事		始業式			
		一年生を迎える会			
学級・総合		係活動を充実させよう		至楽荘生活	
			荘生活の準備		荘生活の報告会
教科・領域等	国語	かえるのぴょん 「聞き取りクイズ」をしよう 白い花びら 季節の言葉	めだか みで調べよう 国語辞典の引き方 モチモチの木	つたえよう、楽しい学校生活 生き物のとくちょうをくらべて書こう	気持ちをつたえる話し方・聞き方 のらねこ
	聞く話す	メモを取りながら聞く 話の中心をはっきり話す		報告すべき内容を吟味する話し合い	適切な言葉づかいと伝えたい意味、気持ち
	書く	言葉のイメージを膨らませて詩の連や続き話を創作する	情報を発信するために書く		物語の設定を生かして続き話を書く
	読む	ファンタジーを読む 行動や気持ち	自分の知りたい情報を読み取り、考えをまとめる	知りたいことを知るために図鑑・パンフレットを読む	続き話を書くために物語の設定を読む
	知識技能	言葉の区切り メモ 人物関係図	図書館の活用の仕方 国語辞典の引き方 場面	箇条書き 比べる視点 カテゴリー分け 横書き	心情を表す言葉
	理科	花や虫をさがそう 植物を育てよう	昆虫の体を調べよう	風やゴムのはたらきを調べよう	植物を育てよう
	社会	わたしたちのまちのようす 学校の周りの様子		小金井市の様子	

体幹を意識した姿勢、効率のよい鉛筆の持ち方

―学校現場の実践報告とともに―

神奈川県立保健福祉大学大学院
教授
笹田（ささだ） 哲（さとし）

新版『小学　書写』教科書では、文字を書く姿勢と持ち方について、運動面に着目した新たなご提案をしています。改訂の趣旨を編集委員の笹田先生に伺いました。

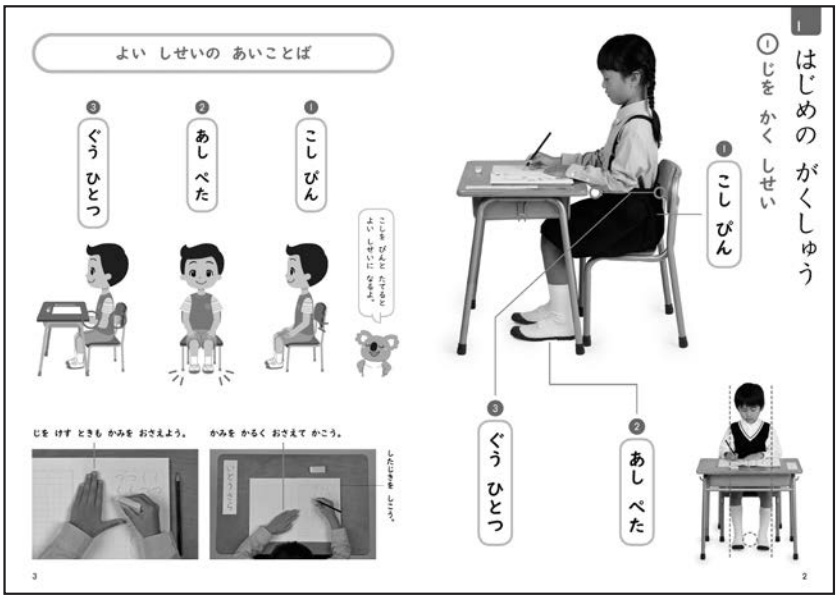
Q　なぜ「せなかは ぴん」から、「こし ぴん」に改訂したのか。

A　学校生活において、きちんと座れず姿勢がくずれる子どもたちが増えていると感じます。

　書字の姿勢とは、文字を整えて書くための体の構えのことです。姿勢で見るべきところは、実は背中よりも、腰の傾きです。姿勢がくずれると、腰（骨盤）は後ろに倒れています。背中だけを正しても効果はありません。

　よい姿勢を促すサポートとして、子どもに腰を意識させて、上に持ち上げるようにします。こうすると腰が起きて、その過程で背筋も伸びてきます。

　このように、体幹がまっすぐに伸びると肩の余計な力が抜けてくるので、その結果、指先の動き（運筆）が良好になります。書字と姿勢は大きく関係しています。腰を起こし（「こし ぴん」）、そして背筋を伸ばすように指導しましょう。



「しょうがく　しょしゃ　一ねん」p.2～5

Q　子どもの姿勢がすぐにくずれてしまう。よい姿勢を持続させる方法は。

A　授業の四十五分間、常に腰だけで体幹を支えることは難しいものです。よい姿勢をさらに持続させるには、両足をしっかり接地させることで体幹を長く支えることが可能となります。両足を床につけて座ることを促します。腰とともに足にも注目しましょう。足が浮いていると骨盤が後傾し、すぐ猫背になります。

　写真に示しているよい姿勢と同じ形にさせる、という考え方ではなく、また、子どもが書いている文字だけを見るのではなく、子どもの姿勢（腰、足）を観察して、「腰と足は、今どうなっていますか？」と適宜、声をかけて（発問）、子どもに気づかせていくとよいでしょう。

Q　「ぱちぱち　ころころ」の活動にはどんな意味があるのか。

A　「先端持ち」や「親指でっぱり持ち」などの気になる持ち方をしている子どもを多く見かけます。「ぱちぱち ころころ」の活動の最大の特徴は、「ぱちぱち ころころ」と指を動かしなが

ら、よい持ち方を促していくという方法です。よい持ち方の写真のとおりにまねさせるのは、子どもにとって、意外とわかりにくいものです。鉛筆を親指と人さし指でつまみながら、ころがします。この動きをすることで、親指の指紋部で鉛筆を押さえることが身についてきます。親指で鉛筆を押さえると、運筆の力が高まります。

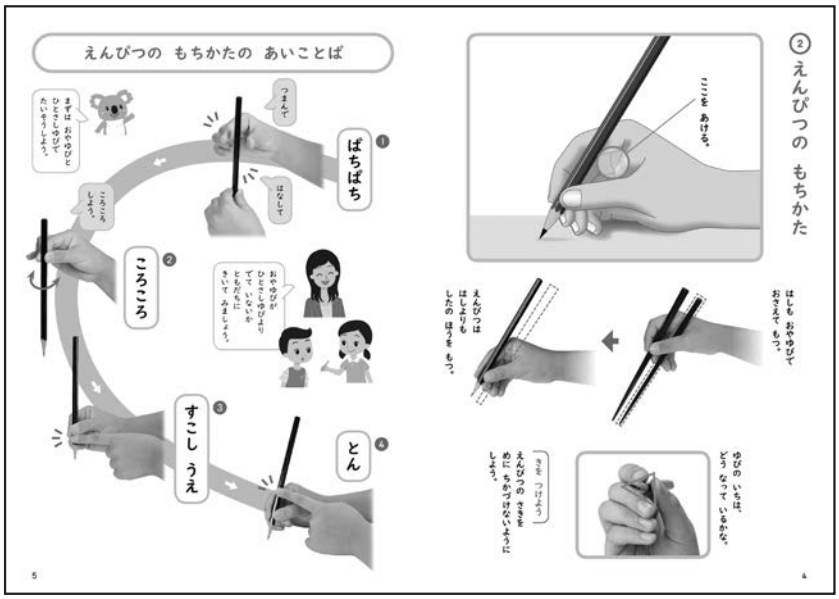
次に、削り部の少し上あたりに指をフィットさせます。少し上のめやすとしては、人さし指一つ分ぐらいあけるようにするとよいです。

最後の「とん」ですが、人さし指の三つめの関節付近に鉛筆を合わせます。そうすることで、親指と人さし指の水かき部にほどよいすき間が生まれ、締め付けて持つのを防いでくれます。この活動をしていると、鉛筆をよく落とす子どもが見られたならば、指の巧緻運動が未熟ということがわかり、早期に支援することにつなげられます。

Q　子どもの持ち方がすぐにくずれてしまう。気になる持ち方とは。

A　気になる持ち方として、「先端持ち」があります。鉛筆の先端を持つ癖がある子どもは書いている文字が見えにくいため、のぞき込むようになり、姿勢がくずれます。これでは疲れやすく、集中できません。削り部を持たないように気をつけます。

次に気になる持ち方は「親指でっぱり持ち」があります。親指がでっぱる持ち方では、筆圧が高くなり疲れます。親指の指腹部を鉛筆にあてる持ち方にすれば、必要以上の力で書く癖が直ります。



実践報告① 「もじもじ」「ぱちぱち ころころ」の持ち方を実践してみて

東京都江戸川区立南小岩第二小学校校長　土上　智子

実践校では、「ぱちぱち ころころ」の合い言葉の前に、「もじもじ」を入れました。「もじもじ」とは、鉛筆持ちの手を、鉛筆の頭から先端に向かって、親指、人さし指、中指で、しゃくとり虫のように上下に移動させる運動です。

最初は、「もじもじ」「ころころ」が上手にできない子どもがたくさんいます。遊び感覚で、「もじもじ」「ころころ」と言わせながら、まず、指の動きが自由にできるよう繰り返し練習させます。

低学年は、正しい持ち方や姿勢を身につける大切な時期です。書写の学習のときだけでなく、国語での文字練習など、授業で文字を書く際には必ずこの「もじもじ」「ころころ」を行ってから書かせるようにします。そして、合い言葉とともに、鉛筆の持ち方を定着させるようにします。

実践してみて、特に「もじもじ」で手・指の運動性を高めることが大切だと感じました。一時期はやった鉛筆回しのように、鉛筆を持つと自然に「もじもじ」を行うくらい習慣化させるとよいと思います。

この合い言葉と方法は、教員にとってはこれまでと違う感じがしますが、子どもたちには違和感はないようで、すぐに喜んで取り組みます。これまでよりも手・指の運動性が高まる分、鉛筆の持ち方の定着がよいように感じました。

実践報告② 学校との連携

筆者は、小学校を訪問し、担任をはじめ、特別支援教育コーディネーター、養護教諭とも連携し、書字の支援を行っています。以下に具体的な実践について説明します。

■座位姿勢へのサポート

姿勢くずれの原因や、椅子と机の高さが合っているかを評価し、子どものレベルに合わせた姿勢支援ついて先生と検討します。筆圧は座位姿勢が影響します。座位姿勢が不安定であると、指先に過剰な力が入る、あるいは指先に力が入りにくいということが起こります。姿勢をよくする姿勢体操を考案し、先生に授業で実施いただく、あるいは姿勢・持ち方のリーフレットを作成し、子ども・保護者に配付し家庭でも取り組んでいただいています。

■手・指の操作についてのサポート

鉛筆の持ち方が悪いと、運筆や書くスピードに影響を与えます。また、書く意欲が下がることにもつながります。

・「先端持ち」のチェック

芯付近の円錐部を持って書く持ち方では、鉛筆の芯が親指で隠れて見えなくなるため、頭や体幹を傾けて斜めから見ようとしてしまい、姿勢も崩れやすくなります。作文などでは筆圧が濃くなり、消してもきれいに消せず手が疲れやすくなります。図工では定規で線を引くときに、手が定規にぶつかり、上手に引けません。算数の筆算の繰り上がりなどのときには、小さな数字を書くのが雑になり計算ミスにつながります。以上のようなことから早期に対応するよう話し合います。

先端持ち

・鉛筆補助具の適合チェック

学級で補助具を使用している場合があるので、補助具の目的、選定方法を説明します。指が補助具からずれたまま文字を書いている子どもが多いので、修正方法を実演して指導に生かしていただきます。

・L型消し法

消しゴムできれいに消せないと書字の意欲も下がります。消しゴムを持たない方の手は、親指を外側に広げ、手のひら全体で紙を押さえるように教えます。

・左利きの子どもへの配慮

左利きは手首を強く曲げて、巻き込んで書くパターンが多くみられます。縦書き、横書きの運筆をチェックし、手首が曲がり過ぎないように、介助法を先生に伝えます。左利きは右利きの単なる反対ではないこと、左利きの子どもが抱える学習の困りごとについて伝えます。

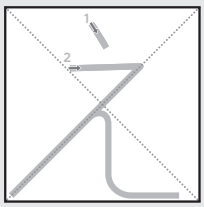
左利き（巻き込んで書く例）

左利き（指導後）

■ますからはみ出る、癖字の指導

・斜めます・ノートの活用

平仮名、片仮名、数字には、「斜めの線」が多く含まれています。「斜めの線」を書くのが苦手な子どもを見かけます。文字は書けるが、癖字になっている場合は、斜めますが有効です。斜線が見えることで、ますと字形の位置関係が理解できます。ますのどの位置に書くとよいのか視覚的に捉えやすくなります。



斜めますの例

笹田　哲・神奈川県立保健福祉大学大学院 保健福祉学研究科 保健福祉学専攻 教授　・日本発達系作業療法学会 理事
・専門分野：発達障害児への書字指導（姿勢，持ち方，癖字など），体育指導，学用品の使い方，特別支援教育

教科横断的な書写学習の在り方
―カリキュラム・マネジメントの視点で―

東京学芸大学教授
加藤（かとう） 泰弘（やすひろ）

はじめに

カリキュラム・マネジメントとは、児童や学校等の実態を踏まえ、教育目標の実現に向けて、教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくことなど、組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことをいう。

これまで、教科ごと、あるいは学年ごとに年間指導計画を立て、それをもとに各教員が授業および学習評価を行うという流れで、一連の活動が個別に展開されることが多かった。また、教科間の連携を図る場合においても、学習内容の共通性のみに視点がおかれ、育成を目ざす資質・能力を踏まえた教科横断的な取り組みはほとんど行われていない。本稿では、カリキュラム・マネジメントの視点からの教科横断的な書写学習の在り方について述べていきたい。

国語科「書写」で育成を目ざす資質・能力

新しい小学校学習指導要領では、「書写」は国語科の〔知識及び技能〕の「我が国の言語文化に関する事項」に位置づけられた。今回の改訂では、〔知識及び技能〕は、〔思考力・判断力・表現力〕（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）の学習をとおして、相互に関連し合いながら一体的に育成される必要があるとしている。「書写」では、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写で身につけた資質・能力を、各教科等の学習や生活の様々な場面で積極的に生かす態度を育成し、書写の能力が生活の様々な行事に生きていることを実感することが大切であるとしている。また、「我が国の言語文化に関する事項」の「言葉の由来や変化」において、仮名や漢字がどのように形成され、継承されてきたのかなどについて基本的な知識をもつこととしており、「書写」と関連が深い文字文化に関わる内容も示されている。

知りたい 文字の世界 平仮名のもとになる漢字

平仮名は、どんな漢字からできたのかな。

安 → 安 → あ
己（コ） → こ → こ
加 → 加 → か
礼 → 礼 → れ

平仮名にはそれぞれもとになる漢字があるんだね。

これから学習する「あ」「こ」「か」「れ」は、「安」「己」「加」「礼」がもとになったんだね。

どんな平仮名になったのかな。

① 波
② 奈
③ 毛
④ 良

⇒ 答えは、28ページの下にあります。　※は小学校で学習しない漢字。

26

『小学　書写　五年』p.26

国語科「書写」としてー教科横断の前提ー

前述の資質・能力を育成するためには、「書写」を週単位の時間割の中に明確に位置づけ、取り立て指導を着実に行うことが重要である。一方、「書くこと」の学習活動との関連を図り、一体的に資質・能力を育成することが求められ、様々な言葉や文を書く場面において、文字を正しく整えて書くことを意識化することが大切である。「書くこと」の言語活動例には、記録、日記、手紙、報告、詩、物語、短歌や俳句などを書く活動が示されている。これらの言語活動において、「書写」で身につけた資質・能力が生かされる場面を明確に位置づけることで、相手や場面に応じて書く力の育成へとつながっていく。**新版『小学　書写』教科書**では、「書くこと」との連携を図り、国語科「書写」としての位置づけをいっそう明確にしている。

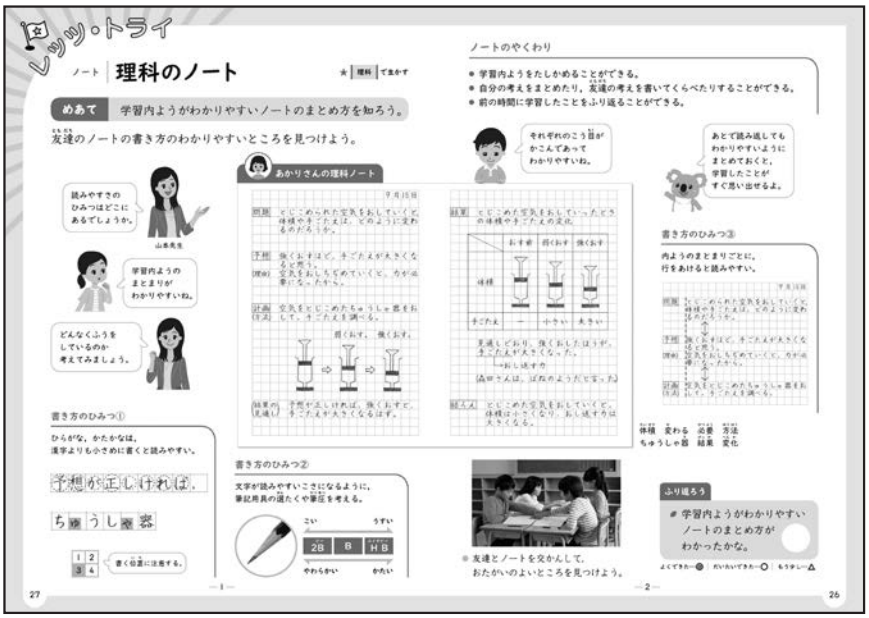
教科横断的な視点で

国語科「書写」として育成される資質・能力は、各教科における様々な学習場面で効果的に活用されたり、各教科における言葉を書く活動をとおして高められたりする。

各教科において、調べたことを整理してまとめたり、効果的に伝えようとしたりする場面で、「書写」と連携した学習を取り入れることが考えられる。**新版『小学　書写』教科書**では、各教科における言葉を書く場面で、相互に参照して活用できるよう教材化を図っており、指導計画の策定にあたり、計画的に授業に組み入れられるようにしている。次に教科横断的な視点で、「書写」で育成される資質・能力を効果的に活用できる場面を具体的に示してみる。

①ノートに整理する場面

学習内容をわかりやすくノートに整理することは、効果的に学習を進めていくうえで、基本的な資質・能力である。学習内容を整理して書くことで理解が深まり、あとで想起できるようなノートのまとめ方の工夫を考え、様々な教科の場面で生かされるようにすることが大切である。



『小学　書写　四年』p.26・27

②記録を取り、まとめる場面

各教科では、見学や観察したことをメモに取り、それをもとに整理して発表する活動が積極的に行われている。メモを取る場面では限られた時間で適切に書く力、まとめる場面では相手に効果的に伝わるように書く力が求められる。このような様々な場面に応じて書く力を、「書写」と他の教科の学習と関連させることで効果的に高めることができる。

『小学　書写　三年』 p.48・49

③相手意識をもって書く場面

「書写」では、適切かつ効果的に伝えるために、相手意識をもって書くことが大切である。例えば、生活科においては、自分と身近な人々や社会との関わりが具体的に把握できるような学習活動の充実を図ることが求められる。カードや手紙で自分の気持ちを伝えたり、招待状を書いたりする場面で、気持ちをこめて丁寧に書くことなど、相互関連を図る学習を設定することができる。

『小学　しょしゃ　二年』 p.33

④その他

我が国おいて、仮名や漢字がどのように生成し、発展・継承されてきたかについて理解したり、伝統文化である書き初めなどをとおして、生活の中の様々な行事において、手書き文字が生きていることを実感したりすることは、道徳科の「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと」と関わりがある。我が国の文字文化への理解を図ることを、道徳科で育まれる資質・能力と関連させて位置づけることも考えられる。

加藤　泰弘　・東京学芸大学教授　・東京学芸大学附属世田谷中学校校長
・前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

第17回

地球となかよし メッセージ 作品募集（2019年度）

「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたことを，写真（またはイラスト）にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に参加賞がもらえるよ！

応募資格	小学生・中学生（数名のグループ単位での応募も可）
応募期間	2019年7月1日 ～ 9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧下さい。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや，自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して，友好の輪を広げた体験，異文化交流，国際理解に関すること ③その他，「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたこと

◎主催／教育出版　◎協賛／日本環境教育学会
◎後援／環境省，日本環境協会，全国小中学校環境教育研究会，毎日新聞社，毎日小学生新聞
＊協賛・後援団体は昨年実績で，継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

教育出版　「地球となかよし」事務局　TEL. 03-3238-6862　FAX. 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－10

前回入選作品

四季のある日本

私たちが住んでいる地球。その中でも，私が住んでいる日本には，春夏秋冬という四季があります。その事により，旬の食べ物や，その時期にしか見られない動物や植物がたくさんあります。そして，夏は暑く，冬は寒いといった特ちょうもあります。

しかし最近では，地球温暖化により，少しずつ季節がくるっているように感じます。

これから先も，地球に住みつづける私たちが，四季を感じながら生きていくには，地球をよごさず，動物や植物を大切にしていく必要があると，ポスターをかいたことにより，あらためて気づくことができました。（小学４年）

小学国語通信　ことばだより〔2019 年 春号〕　2019年3月31日　発行

編　集：教育出版株式会社編集局　　発　行：教育出版株式会社　代表者：伊東千尋
印　刷：大日本印刷株式会社　　発行所：教育出版株式会社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 2-10　　電話　03-3238-6864（内容について）
URL　https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/　　03-3238-6901（配送について）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は，科学技術の進展や国際化，情報化，高齢化などによって，今，大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で，人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには，人や自然を大切にしながら，共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは，この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め，社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社　〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL：011-231-3445　FAX：011-231-3509
函館営業所　〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一ビルディング 3F
TEL：0138-51-0886　FAX：0138-31-0198
東北支社　〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL：022-227-0391　FAX：022-227-0395
中部支社　〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL：052-262-0821　FAX：052-262-0825
関西支社　〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL：06-6261-9221　FAX：06-6261-9401
中国支社　〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL：082-249-6033　FAX：082-249-6040
四国支社　〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL：089-943-7193　FAX：089-943-7134
九州支社　〒812－0007 福岡市博多区東比恵 2-11-30 クレセント東福岡 E 室
TEL：092-433-5100　FAX：092-433-5140
沖縄営業所　〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL：098-859-1411　FAX：098-859-1411

本資料は，文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき，一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとり，配付を許可されているものです。